弱虫鴉の足跡

カスケードレインジの右手のアレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弱虫鴉の足跡

【Ｎコード】
Ｎ９９８６Ｚ

【作者名】
カスケードレインジの右手のアレ

【あらすじ】
アライアンス本部所属レイヴン、モリ・カドル。
彼の平凡な日常。

基本的に作者が受信した電波で構成されているため、余り面白く無いかもしれません。

感想を書いて頂ければ非常に嬉しいです。

エピソード１（前書き）

以前短編、弱虫と偽物として投稿したモノに少し手を加えました。

エピソード1

耳障りなアラートがけたたましく鳴り響く。

コンデンサ内のエネルギーを使い果たした漆黒の機体が重力に捕まり、無様に落下していく。

降下速度を殺すこともできず地面に叩き付けられる。

着地の衝撃で機体が硬直する。

そこに重金属の砲弾が次々と殺到する。

機体温度が耐熱温度を越える。

熱暴走。

しかし、チャージング中の機体は冷却すらままならまい。

見る間に減っていくＡＰ。

それでもなお、彼は勝負を諦めない。

敵をロックサイトに捉えようとあがく彼の目に飛び込んだのは、

左腕の光の剣を振り上げた黄色い鋼の巨人だった。

直後に激しい衝撃が彼を襲う。

網膜に映し出される映像が途切れる。

「システム、テストモード、終了します。」
無機質な合成音声が告げる。
「また負けた・・・」
彼は力なく呟く。
「そうね。これで6連敗よ。」
ヘルメットのレシーバーから管制官の声が聞こえる。「もう一度、もう一度頼む。」
彼の声には明らかな疲れが滲んでいる。
しかし、諦めの色は全く無い。
「はぁ、あのねぇいい加減休みなさい。いくらしかし、彼は食い下がる。「・・・あんたの気持ちもわかるけど、フラフラのあんたを担がされるこっちの身にもなってよ。」
今度は静かな怒りの籠もった声が返ってくる。
「うぅ・・・判ったよ。」このままではまたいつかのように説教無限ループに入ってしまう。
それはマズイ。
とてもマズイ。
彼は渋々諦める。
神経接続を解除しハーネスを外す。
ハッチを開放し、シミュレーターから這い出す。
「全く、熱心なのはいいけどもう少し加減しなさい。」
頭上から管制官の声が降って来る。
「いや、でも・・・」
「あんたがどっかの誰かに憧れてるとか、足手まといは嫌だとか思ってるのは解るけど付き合わされるこっちのことも考えなさい。」
彼女に反論しようとするが「いや、付き合ってくれと一言も言ってn」
「あんた1人でほっといたらまたどっかで遭難するでしょうが！！」
何時だかの恥ずかしい記憶が蘇る。
「あ、あれはその・・・」

言い訳しようとして、
「それより、あのポンコツいい加減なんとかすれば？あんなアセンJ」
「それはダメ！！アレじゃなきゃいみないんだ！！」機体の話しになり、珍しく声を荒げる彼。
「ハイハイ、あんたは本当にジノーヴィーのことになると・・・」
「だっt」
「分かったから、どうせ明日もやるんでしょ、とっとと寝なさい。」
今度は少し柔らかい声が返ってくる。
「・・・うん、わかったよ。」
言われて漸く自分がかなり疲労している事に気が付く。
自室にとぼとぼと歩いていく彼。
「全く・・・あんたは弱虫なんかじゃないわよ。」
「ふぇ、なんて？」管制官が何か言ったがよく聞こえなかった。
「な、何でもないわよ！とっとと寝なさい！！」
「は、ハイ！只今！」
管制官の勢いに負けた彼、モリ・カドルは速やかに戦域を離脱した。
何故彼女の機嫌を損ねたかわからないが。
そうしなければ今度はナニヲサレルカワカラナイ・・

エピソード1（後書き）

如何でしょうか？

以前の方が良かったですか？

続いては・・・まぁだいたい予想がつきますよね。

感想お待ちしています。

エピソード２（前書き）

続いては　続　弱虫と偽物にちょいちょいと手を加えました。

戦闘シーンのクオリティが・・・

難しい。

それから後書きで皆様にご協力をお願いします。

エピソード2

明け方、まだ薄暗い空。
静寂を破りながら、１機の大型輸送ヘリが飛んで行く。「まもなく作戦領域よ。降下準備をして。」
レシーバーからのお馴染みの管制官の声を聞き、彼、モリ・カドルは今回の作戦内容を思い返す。
「正体不明のＡＣを捜索、必要ならば撃破せよ、ねぇ。」
そう、それこそが今回彼がアライアンス本部から受けた命令であった。
バーテックスとの戦いが激化する中、正体不明のレイヴンの活動が確認された。状況によっては敵対する可能性がある上、戦術部隊は頼りにならず、本部でＡＣに対抗出来る戦力はモリしか居なかったのである。
「・・・本当に大丈夫かな・・・僕で・・・？」
堪え切れず、不安が漏れていた。
「大丈夫、もっと自分に自信を持ちなさい。」
珍しくやんわりと言い聞かせるような返事が帰ってくる。
不思議とその声で心が落ち着く。

神経接続開始。

首筋のケーブルから脳に直接データが送り込まれる。
網膜投影されるそれらに異常がないことを確認。

マスターアーム・オン。

メインステム、戦闘モード起動。
「降下開始、先行するレッドチームと合流して。」

漆黒の機体、ピンチベックが戦場に舞い降りる。

レッドチームとデータリンク、ディスプレイに向こうの状況が映る。
「こちらはレッドリーダー、よぉ、レイヴン、待ってたぜ。」
いかにもベテランと言った落ち着いた様子でレッドリーダーからの通信が入る。
「モリ・カドル、ピンチベックだ。そちらへ向かう。」
ブースターを吹かし合流地点を目指す。

６機の８５式ＭＴから成るレッドチームは互いに十分に間隔をとり、索敵を行っていた。
「こちらはレッド３！熱源探知！距離・・・なっ！近すぎ」
突如飛来した大口径の粘着榴弾に直撃され、レッド３は一瞬で撃破される。
「くっ！？各機」
レッドリーダーが指示を出すより早く今度はマイクロミサイルがレッドチームに襲い掛かった。
「レッドチームが攻撃を受けてる！？恐らく例の不明機よ！急いで援護して！」管制官の言葉に彼は最大推力でレッドチームに向かう。
間に合ってくれよ！

現場にたどり着いたモリの目に飛び込んだのは深紅のＡＣがレッドリーダー機をブレードで切り捨てる正にその瞬間だった。
「間に合わなかった！？」「あの短期間で全滅！？気を付けて、強敵よ！」
管制官の警告とミサイルアラートはほぼ同時。

間髪入れずミサイルが飛来。

ピンチベック、、回避運動しつつも迎撃ミサイル発射。

ミサイル、３発撃墜。

残りの２発を躱しつつ、グレネードランチャーを起動。

ロックサイトに深紅の機体を捉える。

トリガー。

敵、左へブーストダッシュ。

命中せず。

敵、リニアライフルを発射。

被弾。モリ、すかさずライフルで反撃。

命中。

「敵は高機動・高火力型よ、装甲はそれ程でもない！落ち着いて、正確に当てて！」

管制官が檄を飛ばす。

ライフルのマガジンが空になる。

グレネードを展開。

深紅の機体、急速接近。

左腕を振り上げる。

モリ、グレネード発射。

激震。

中枢コンピュータが右腕破損を警告。

敵も右腕破損、コアにも損傷。

互いに距離を取る。

「はあはあ、ダメージは与えてる。でもこっちもライフルが・・・」

敵、グレネード発射。

回避。

避けた先にミサイル。

「くっ、そぉ！！」

寸での所で躱す。

「後ろよ！！」

管制官の警告。

背後至近距離、ブレードを振り上げた敵。

近すぎる。

回避が間に合わない。

白熱した思考を置き去りにして、体が行動する。

モリ、２門のグレネードをパージ。

光刃がめり込み、長大な砲身がひしゃげる。

爆散。

敵、左腕破損。

「ッオォォォォ！！」

モリ、ダガーを突き出す。

プラズマが深々と深紅のコアに突き刺さる。

敵、沈黙。

「はあ、はあ、か、勝った？」

「何とか、ね。これで作戦終了。回収に向かうわ。」

数分後、ヘリに積まれボロボロの鴉はねぐらへ帰る。

アライアンス本部・格納庫

ケージに納まったピンチベックからモリが這い出す。「お疲れ様。強敵相手によくやったわ。」
管制官が労いの言葉を掛ける。
が、モリは俯いている。
「どうしたのよ？」
心配になり、再度声を掛ける。
怪我でもしたのか？
「う、ぅ、恐かったよぉ」顔を上げればそれはもう色々大変な事に。
ブチリ
明らかにナニカが引き千切れる音。
「あんたは！この！！珍しく褒めようと思えば！！情けない！！そんなだから弱虫何ていわれるのよ！！」その日、モリが真っ白になるまで管制官の説教は続いた。

エピソード２（後書き）

さて、偽物対決でした。
・・結局ＥＯ使えなかったです・・・
・・・文才なさ過ぎて悲しい。
・・・実は偽物達のハナシは続くかもしれません。

さて、皆様にご協力してほしいのですが、
読者様からのリクエストが有り、ジノアグとモリ、フライボーイのお話しを書かせて頂こうと思うのですが・・・
モリとフライに本名が欲しいのですが、自分は余り思いつかかず・・・

是非ともご協力下さい。

また、リクエストがあれば出来るだけ頑張らせて頂きます。

???（前書き）

また変な電波を受信しました。

・・・何やってんだろ俺。

???

某日、某所。

人気の無い町外れの廃屋に、ひっそりと鴉達が集まっていた。

室内には円卓。

暗い中そこだけが照明で照らされており、四人の出席者達が座っている。

「うん、誰かこの状況を説明してくれないかい？」

いかにも調子悪そうにそうに口を開いたのは、「しかいしんこう」と書かれたプレートの席に座るレイヴン、モリ・カドルである。

その言葉に無言で背後の壁を指差す赤いパイロットスーツのレイヴン。

プレートは「おにきす」と書いてある。

オニキスが指差した壁には〈偽物座談会〉と書かれた横断幕。

「またぞろ作者が変な電波を受信したらしい。」

忌々しげにオニキスは言い放った。

「成る程、フライボーイのキャラが固まらないから現実逃避したんだな。」

「さーてぃ」のプレートの壮年のレイヴンが言う。

「ああ、前回も本当ならハッスルワンが出るはずだったがあの産廃、キャラがワカラン！！などと言いだしやがった。お陰でヒドイめにあった。」

遠い目になるオニキス。

「と、ところでそのハッスルはどこに行ったんだい？」

と、空席の「はっする・わん」の席を指差すモリ。

「ん、着信？」

モリの端末にメール。

内容は・・・
移動中のハッスルがイツァムの襲撃を受けて重症。参加は無理。by
カスケードレインジの左手のアレ

「あのアホやっぱりキャラが分からなかったな。」
「と、言うか手抜きだね。」
「なら最初から出さなければいいものを。」
上からオニキス、モリ、サーティである。
と、偽物達が作者を批判する中、先程から一人、会話に参加しないレイヴンが。「待て!!オマエラ何故私がここにいるのか気にならんのか!?」
声を荒げたのはカラードネイルだ。
キョトンとする三人。
ややあって、モリが答える。
「え、ゼロの偽物じゃないの?」
「違うわぁぁぁぁあ!!」激怒し、走り去るカラードネイル。
一体何故怒っているのか理解出来ない三人。

参加者が三人になった矢先、突如激しい衝撃が。「出てこいモリ・カドル!!今日この場でお前の息の根を止める!!」
ジナイーダの襲撃である。「くっ、こんな時に・・・管制室、聞こえるか?直ぐに援護してくれ!!」
ピンチベックで出撃するモリ。

「司会進行がいってしまった。」
まぁ働いていなかったが。「このまま二人で続けても仕方がないな。」
「では、帰るか。」
それぞれのガレージに向かうマーウォルスとオニキス。

と、オニキスの行く手に現れる1機のＡＣ。
漆黒の装甲。
右手のプラズマライフル。背中の垂直ミサとＥグレ。「探したぞ、ハスラー・ワン！！」
フリッツ・バーンは怒りをあらわに怒鳴る。
「え、ちょ、人ちｇ」
その日以降オニキスの姿を見たものは居ないと言う・・・

???（後書き）

何コレふざけてるの？
書いた自分でもそう思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9986z/

弱虫鴉の足跡

2012年1月7日06時49分発行